

「早稲田文学」の寫実主義

——「政治と文学」を中心として——

中 村 完

まえがき

宮本顕治氏は、「過渡時代の道標」（昭和四・一〇）の中で、明治二〇年代における文学的インテリゲンチヤの精神状況に対していちばやい史的省察を試み、当時の一般的な「革命的状态の退化」に当つて、彼等が、その自由主義的な志向をそれぞれの形で止揚かつ清算していつたみちすじを、次の三つのケースに概括し、きわめててぎわのよい解説を加えている。

蹂躪された「自由民権」の要求を獲得するために、労働者、農民の階級に結びついて、新しい革命的潮流を形成するか。封建勢力との抱合を経て、更に飛躍、発展の向上線を進む資本主義の親衛隊となるか、又は闘争の精神を欠如したブルジョアジエの凡俗主義への絶望的輕蔑から、続いて政治的無関心主義に落ち込んで、誇り、高き嘲笑者として消極的な反抗を示すに止まるか。〈傍点筆者〉

ここにこめられた氏の批判的意図がたとえどのようなものであ

るにせよ、当時の文学的インテリゲンチヤが、この三つの暗路のいずれかに身を乗せて行つた事実、ことに、今日的な「逃亡奴隷」のプロト・タイプ^{プロトタイプ}の發生因でもある「第三の路」などは、現在につながる生きた問題として、いちは綿密な史的究明をへなければならぬまい。たとえば、『小説神髓』を基点とする寫実主義が、二葉亭の『浮雲』（二〇・六）などによつて、批判的リアリズムへの可能性を与えられながら、やがて、その「政治的無關心」の恒常化とともに、リアリズム本来の社会批評性との無縁を鮮明にしてゆく過程は、たしかに、宮本氏のいう「第三の路」とぬききたい関係にあるわけだ。したがつて、寫実主義が、そのうちに持つリアリズムとしての方法的欠陥なども、たんに比較論的な検討の領域にとどめず、その現実の場への適用を困難にした社会的なものとかかわりに於いて考察する必要もあらう。

もちろん、当時の社会現実に対するこの「誇り高き嘲笑者」としての「消極的な反抗」にしても、「反抗」そのものの意義さえ氣にとめぬ似而非寫実主義者たちよりも、逆に、彼等のその低次

元での実践に対して、充分に批判的観点に立ちえた北村透谷や内田不知庵などによつて、おし進められた事実を忘れてはならぬ。

しかし、その「消極的な反抗」の体现者としての透谷や不知庵が、彼等の近代的人間観に基く新しき文学意識を対決させていたのは、「写実」という方法的擬装によつて、その文学觀念の非近代性を糊塗し去ろうとした「硯友社文学」などであつて、決して写実主義理論自体に対してではなかつた。むしろ、本来の写実主義からは「消極的な反抗」の要素は抽きがいはずである。そればかりでなく、また、事実として、二〇年代における写実主義展開途上の或る時期には、理論提唱者自身の側に、『小説神髓』における原則論的な規定の枠をゆさぶるほどの、かなり激しい社会意識の高揚もみられ、その発言の推移のうちには、ある意味で「消極的な反抗」の姿勢をよみとることもできるわけである。

これは、いひかえれば、写実主義がリアリズムとしての実質をもつべき唯一の可能性を導いた時期であつたかも知れない。そして、もし、そこに、なほどこかの史的意義があるとすれば、もちろんそれは、今日の問題意識で充分見当のつくことなのだ。以下、私なりの観点から、主として「早稲田文学」を中心に、これらの史的事実を追尋してみたい。

国家主義は、日本資本主義における封建的残存物の強力な存

在の故に、既に自由民権運動の以前からアジア的イデオロギーを纏つて形成されて来たが、十年代におけるこの運動の強力な発展と「欧化主義」に対する反動として二十年前後の思想界を支配し始めた。（鳥井博郎『明治思想史』河出書房・日本近代史叢書・Ⅲ）

この「二十年前後」における国家主義の急速な擡頭は、二二年の「欽定憲法」發布を中心とする絶対主義的な政治体制のいさおの仕上げによつて、当面の課題を失つた自由民権運動の残存勢力が、その退潮を決定づけられたとき、殆んど独走の態勢に入つて行くわけである。第一議會（二三・一一）における民党の汚辱にみちた敗退や、第二回総選挙（二五・二）にあつた全国の干渉などを、その最も象徴的な事件として、政治の場の反動態勢が順次組織的なものにおし進められて行くみちすじには、同時に、「二十年初頭の日本資本主義は、軍事・鉄道・銀行など殆んど全産業に、国家資本、国家的保護の重味がかかつており、国家主義が本質的に官僚的原理たる」（丸山真男『日本のナショナリズム』河出書房・日本近代史叢書・Ⅰ）事情がつつまこまれていたということになる。そして、「日本資本主義」の自律的な展開に対する枠づけとしてのこのような国家主義的規制は、当然、さまざまの社会的矛盾を醸成してくるわけだ。事実、この時期において、資本主義達成のために動員された下圧エネルギーのしわよせの最初のあらわれとして、二三年には、はやくも、第一期の経済恐慌をむかえ、同時に、その余波をうけて、鳥取、若松の米騒動など数件の農民騒擾が発生し、翌二四年には、わが国はじめ

ての同盟罷工である石工のストライキが東京でおこっている。また、このような「日本資本主義」の基盤がための併行条件として強化された国家主義勢力は、二五年ごろには、すでに、支配権力の直接行使される政治・経済の場をこえて、深く社会現実の末端にまで浸透してきているともいえるよう。

たとえば、すでに、二〇年におけるその創刊らしい、政治的現実の変動をつぶさに注視してきた『国民之友』は、当時の国家主義の動向について、その政治評論「自由思想最後の戦場」(二五・一〇)の中で、次のような批判を加えている。

政治、商業、文学、社会、工業の上に於て退治せられたる禍神は自由進歩の天使が注目せざるを事として、凡べて教育社会に逃げ込み。見よ、帝王神権の説は、曾て政治上に退治せられたるものならずや。然るに彼の禍神は、教育社会に入りては、神典国典なるものを基として場々として出で来らんとす。

『国民之友』記者のこの「教育社会」の現状に対する觀察は、当時の教育界に起つた多くの事件を考え合せてみると、決して問題意識の放肆な誇張でないことがわかる。たとえば、二十四年一月、第一高等学校講師内村鑑三が、いわゆる「御真影」への敬礼を拒否して、半句の抗弁もなく解職となつた事件、また、二五年二月、史学者久米邦武が、その学術論文「神道は祭天の古俗」によつて、神道家、保守的史家、国粹主義者などの一勢非難をうけて退職させられた事件、あるいは、二五年一月、井上哲次郎の国体明澄を企図した談話筆記(『教育時論』に掲載)に端を発したいわゆる「教育と宗教との衝突」事件など、この時期に、教育

界、宗教界の問題となつた事件は少くない。

ことに、「教育と宗教との衝突」事件は、「基督教は教育勸語及び我が国体に背反する」と断じた井上の発言が、「天皇制と基督教」という国家的な問題につながるものであつただけに、はからずも、激甚な論争を展開することになった。そのため、井上の主張を支持するキリスト教排斥派とそれを反駁するキリスト教弁護派との間には、殆んど半年におよんで polemick の応酬がつづけられ、その間、「基督教を攻撃するもの単行本にて二十余種に上り、之に対して基督教を弁護するもの十余種、其他雑誌又は新聞に發表せられた意見は無慮数百に及ぶ」(清原貞雄『幕末明治時代史』―「思想界の傾向」)という思想界未曾有の大事件となつたのである。いわば、この論争を契機として、国家主義勢力は、その政治的ヘゲモニー確立の一環としての教育界あるいは宗教界への思想的統制の意図を、はつきり露呈したわけである。その点、反動化の態勢は、直接的な政治とは別の場においても、「自由」の名を冠する一切の思想に対して精神的暴力を行使するという、きわめて激しい段階に入つてきたといえるだろう。

そして、内村事件、久米事件から、「教育と宗教との衝突」事件へと、しだいに激化する以上のような、「思想」の対決が、当時の言論界における進歩派にはげしい衝撃をあたえ、「社会」と「思想」の動きに対する正確な把握の必要を、あらためて認識させたことは疑えない。そのうち、とりわけ、自由主義的な立場をもちつてきた一部の新聞や雑誌などが、不安をこめながらも、そのような国家主義的反動の実態分析に、きわだつた反応を見せ

てくるのも決してふしぎなことではあるまい。

たとえば、当時の『国民之友』や『早稲田文学』などが、その多くの紙数をさいて、これらの事件の経過をめんみつに記録している事実のうちには、すでに、たんなる「報道」としての枠内にとどまらぬ編輯者の意図が、それとしてはつきりうかがえるように思う。ことに、二四年一〇月の創刊いらい、徹底した記実主義的態度をとることで、「没理想論争」のさいにも、かくべつの動搖を示すことのなかつた『早稲田文学』が、二六年にいたつて、以上の三つの事件への注目をふくむ形で急速に政治的な動きへの関心をみせ始めてくることは、たとえそれが、従来の客観主義的な編輯方針をつき破るほど激しいものではないにしても、その社会現実への配慮の深まりにおいて、一種の批判的な視点をきずきえていくわけで、そこには、おのずから「消極的な反抗」の意識に通ずるものもおつたにちがいない。

※1・2内村事件と「教育と宗教との衝突」事件については、もつぱら清原貞雄著『幕末明治時代史』に拠つた。また、当時の『女学雑誌』『国民之友』などにも、かなり批判的な解説が載つてゐる。久米事件については、おもに『早稲田文学』の報道記事の各所から、その概要を得た。久米は、この事件の後、大隈重信の招聘で、東京専門学校教授の教職についた。

※3・4『国民之友』は、井上に対する最強の論駁者である高橋五郎の「偽哲者の大辯論」以下を載せ、同時に、その「時論」欄で、めんみつた記録を継続している。また、『早稲田

文学』は、「教育と宗教との衝突」事件については、三三、三七、三八号で、久米事件については、一二、三七、三八号で、それぞれこまかな経過報告を収載している。

二

徳川氏三百年絶長太平の反動は皇国未曾有の変調たるべけれどそれすら僅々二十有五年にして怒濤收り激浪志づまり不自覚の間に鷗眼り帆かへる長閑なる斜陽の好風景とならんとせり彼のわづかなる二百年弱の反動によりて欧米全土をさへも蕩揺せし仏国の革命に比ぶれば何ぞ其の力の微弱にして其の果の平穩なる（「時文の傾向」——『早稲田文学』三二号一・一五）へ傍点筆者

このフランス革命との対比による「明治維新」の史的位位置づけは、ちょうど一年前、これと同じ主題について、当時鋭鋭の批評家であつた内田不知庵が、

米艦来りて幕府倒れ封建廃せられ自由論入る。凡そ是等の変革穀中の蠅蚋以て自ら溼せし日本の天地を一新したる仏国の革命が全欧土の文明に波及せしと同じく一般人民の思想を覆へせり。（『現代文学』——『国民之友』二四・一一—二五・一一）

と論じて、維新における社会変革の実質を、フランス革命のそれと同質視したその多分に皮相的な考察にくらべると、いぢだんと深化した社会認識の発現とみることが出来る。もちろん、同一の主題を追つた設論での両者のそのような懸隔は、たんに、社会認識の深淺にとどまらず、その社会認識の深化を必然的なものと

して、激しく個人の内部を衝迫した社会現実自体のうちにも、求められるべきであらう。しかし、いずれにしても、明治社会全体への以上のようなすぐれたみきわめが、その枠内の一現象である跋行的な明治文壇へのてきびしい考察に転じていく過程には、多くの注目すべき見解が定着されているわけである。

見よ維新以後の反動の頻繁なりしことを又頻繁なることを政治社交の上は吾人これをいふを要せずひとり文学の上をだに見よ……明治文学は譬へば猶跛子の走るが如く三步一蹶二歩一蹶さきには多望に見えたりし向無前的自由の文学より渡のうねうねただよひ移りて今や回顧因循なる纏綿の文学の彼岸に流れ寄らんとせり（『早稲田文学』——「時文の傾向」）

ここでは、当時の文壇における偏向的な側面は、あきらかに、明治社会の一般的な反動化現象の一環としてとらえられているといつてよい。さらに、同号同欄の「アウガスタン時代」で、『早稲田文学』記者は、「明治廿六年以後の文学を称して明治のアウガスタン文学といふ」と、文壇の閉塞状況についてきわめてふくみの多い発言をしているが、その多分に抽象的な推断も、ことにそれが、英文学史中、「暗黒の時期」とされるアン女王治下の文学状況との比較による結果でもあるだけに、文学と政治との相関々係ははつきりよみとられていたにちがいない。そして、すくなくとも、その展開のしかたにおいてより正統的な英文学史との比較によつて、当時の「明治文学」の一般的な作品傾向としての社会性、批判性の欠落は、ますますあらわなものにされてくるわけだ。

今の写実小説をもて、ゾラの面影なりと速断せるものは、フィールディング、デフォー、スモールレット等が世に広く聞えざる諸社会小説を繕きて見よ……則ち吾人が十八世紀の英国アウガスタン文学を度々小にして繰返しながら揚々として十九世紀の明治新文学を創始しつつありとかたはらいたくも誇れるを覚らん……明治文学は僅々二十五年の間にエリザベス時代よりアン時代までを経過せざるべからざるか何ぞ隆盛のさしも速なる風流仏と浮雲と舞姫と伽羅枕とが明治ベッス文学の記念たるかベッス朝の面影がかくの如くにして止まらば時代の面影として現れん」（同——「明治廿六年」）

フィールディング、デフォー、スモールレットなどの作品群に冠した「社会小説」という名称の適否は別として、写実小説の範型を暗にゾラに求める記者の意図には、おそらく、文学の社会性への志向がこめられていたにちがいない。その点、この時期の『早稲田文学』には、発言全体をもつと意識的に操作することで、従来の「方法」偏重の写実主義理論を、社会的な観点からの修正にもちこむ可能性もあつたといえるのではなからうか。

文学史的定見を俟つまでもなく、『早稲田文学』の「公平なる報道者をもて自ら任せんとす」（創刊号・「普告」）という出発点の自己規定が、やがて、「没理想論争」にのぞむ逍遙の発言において、その限界の一面となることは否定できない。しかし、同時に、このみずから設けた「記実主義」的観点からの認識が、ある面では、当時の評壇を席捲した主観論²の積極的な展開よりも、「現実」を、いつそう正確にみきわめる能力をもちえたことを忘

れてはなるまい。いわば、「事実の報道を先として必ずしも評論を旨とせざるなり」(同三号・「吾にあらざして汝にあり」)というきわめて受動的な認識形式が、主観的な選取意識を排除すること、逆に、対象のもつ意味を過不足なくとらえている事実もある、ということなのだ。したがって、「没理想論争」そのものへの限定的な穿鑿に牽引されて、その範囲のみから抽きだされる結論に、「早稲田文学」における「客観的記実主義」全体への評価を閉じこめようとすれば、それはもちろん、形式的推論にすぎまい。その点、たとえ当時の『早稲田文学』への検討にしても、時としては、「没理想論争」とは別個の視点に据えてみる必要があるといえよう。

ところで、以上のように、二四、五年当時の政治的反動期における「明治新文学」の大勢を、「十八世紀のアウガスタン文学」、いわば、文学の危機、として把握することは、結果として、当然、将来の文学に対する要請と、その具体的なあり方についての配慮につながつてゆくわけである。たとえば、次号の同じく「文界現象」欄の「首府と地方と」(二六・一・三〇)であるが、そこで、

此の明治の時代は平民得意の時期にして地方は平民の本山ならずや今日すらキナカモノといふ侮蔑の語は已に日本の地に絶跡せんとす諸子は奮つて首都を凌ぎ再び奮つて歐洲全土を圧倒せんとする勇氣なきか何ぞ死学に拘泥することの甚しき何ぞ活現象を重んぜざることの甚しき吾人は多言せず此の教言にして徹せずば億万言はた徹せざるべし。

と、地方文学の必要性と地方青年読者の「新文学」への自覚を力説する記者の意図は、おそらく、そのような要請の具体的な推進にあつたはずである。このようにみてくると、二六年の初頭、従来の「時文評論」の発展的な形として新設された「文界現象」欄は、あらかじめ想定された主題を展開するための「場」の拡充とも考えられるわけであり、いわば、「政治と文学」の問題を現実の中から掘りおこし、それに対する考察を組織的に定着することは、まえもつて予期されていたことになる。また、事実、それは、一連の後続論文のうちにそれとしてはつきり指摘できることなのだ。

政事上の現象と文学上の現象とは共に当時当処に活動する国民的精神の照影なり其の本分と其の形状とは如何ばかり背馳すとも其の相離るること霄壤の如くに甚しからんは思ふに健全の狀態にあらざるべし。(「政事と文学と」・同三八号||二六・四)といういわば「政治と文学」との原理的な相関々係に対する認識を前提として設定された視点は、また当然、政治と文学の關係の實状に向けられるわけで、

吾人つくづく方今の社会的情勢を観察するに文壇と政事壇との相隔絶したる胡越も甞ならざる趣あり假令英國の十八世紀若しくは仏國の革命期に於ける二者の關係の如きは之れを稀有例外の現象なりとすも現今の如き甚しき隔絶も恐らく人間の不具なるものなるべし。(同上)

と、「方今の社会情勢」のうちに、はつきり、政治と文学との乗離狀況を指摘し、さらに、その原因を、次のような点にさぐり

當てている。

新時代の詩文人を以て自任する者の多数は概して世界大の理想なきと同時に一國大の同感にも乏しく、而して今の経世家を以てみづから居る者の多数は殆んど正当に謂ふ文学の何等のものたるを解せざるなり（同上）

當時の「政治と文学」の關係のありよう——その孤立的な成立を契機としての——を、文学と政治との両面から考察することで、記者が、「詩文人」と「経世家」との間に、それぞれの実質的な限界がもち寄つてつくる空隙をみきわめていることは、たしかに記者自身の鋭い批判意識をものがたるものだ。と、同時に、それは、『早稲田文学』が、すでに数年前『小説神髓』で提出された「文学」自体の一切の功利意識からの絶縁と独立という基本的な課題の措定を、あらためて、「政治」への配慮をもふくむ多分の社会的な観点からみなおしている、という形になつてきているわけである。いわば、このような政治との対比による文学の社会的な考察は、『早稲田文学』にとつて、創刊當時の記実主義の粹を實踐的にこえることで、同時に、『小説神髓』いらいの写実主義の理論的偏向をも修正するという二重の可能性をふくむものであつたと思われる。

しかし、それも、文学史的には、やはり可能性の域にとどまつたもののようである。というのは、以上のような「文学」の側からの「政治」に対するせつかくの批判的意図も、結局は、政治現実そのもののへの分析にいたらないで、きわめて安易に、その些細な派生的現象である「政治小説」一般への抽象的な論難に傾斜し

てゆくからである。

※1、主として、鷗外の評論活動をさす。

※2、三十一号（『二六年一月一日発売』）から、従来の「時文評論」の一面と「文界彙報」「海外文学」とを合一、拡張する形で、「文界現象」欄が新設された。

三

吾人は不幸にも彼等の多数が最高義に謂ふ文学の思想は頗る貧なるを認めざるを得ず、吾人は彼等をもて文章に巧ならずとはいはず、詩文の好尚を飲きたりとはいはず、然れども其の審美の標準と鑑識の原理に至りては吾人未だ彼等の中にローリー、テムブル、ビット、シェリダン等の面影を多く見ることを得ず。

（「政事と文学と」・同上）

一般的な近代文学論との照合を基本とする「政治小説」批判は、この『早稲田文学』での発言を俟つまでもなく、すでに、二三年ごろ、當時の先駆的な批評家としての内田不知庵が、その写実主義文学論の實踐的な展開の途上、とくに、文学における一切の直接的な「功用」の排除を目的として提出した一連の「政治小説」^{※1}批判などに、はつきり指摘できることなのだ。たとえば、矢野竜溪の『浮城物語』（二三・四）に対する彼の次のような批判である。

若し竜溪居士が胸中に鬱積する不平を洩すに過ぎざれば、是れ政治家の玄関番が作りし所謂佳人才子的の政治小説と同種にして審美学上論評するの価値なし。若し徒らに読者を悦ばしむる

に止まらしめば、忍月居士が評せし如く宮本武勇伝と一般にして到底岳亭以上に置く能はず。……末広鉄腸の『雪中梅』尾崎学堂の『新日本』等の如き、悉くかかる類にて、畢竟漠然たる立案を設くれば大なりと妄想せしが故なり。（『浮城物語』を讀む）『国民新聞』二三・五・八）

この『浮城物語』評にからめた不知庵の「政治小説」批判が、その性急な否定意識と文学観の未熟という面に制約され、政治小説成立の社会的根柢を衝きえないままで、ほぼ、形式的な論及におわつてしまつた事情は、すでに、柳田泉教授が、その「矢野竜溪『浮城物語』について」（『政治小説研究』・下）で指摘されたとおりである。そして、そのばあい、とくに、政治小説のもつ非近代的な実質への批判意識が、もつぱら、近代小説としての「審美的価値」という芸術的形象性へのせんさくにひきつけられて、その啓蒙的ないし社会的な側面をみおとした点に、批判論としての限界がみとめられたわけである。そのようにみると、いま再び、「審美的標準」ないし「鑑識の原理」という多分に抽象的な評価基準によつて、政治小説のその後を論じようとする『早稲田文学』は、不知庵の形式論的な批判をそのまま踏襲しているともいえるわけで、いわば、両者の「政治小説」批判の間には、質的な深化は殆んど存在しないといつても決してあやまりではなからう。

また、政治小説に対する『早稲田文学』の以上のような形式的な考察は、そのまゝ、一方の「詩文人」への批判にも、ように転用されるわけで、その点、批判論としての抽象的な偏向は、い

ぜん、払拭されることもないのである。

吾人は決して彼等文士の社会より明治のアリストフヘニス、明治のラマルチーン、明治のキクトル、ユーゴーの現れんことを熱望するものにあらざれども遍く三世を達観するの詩文人は渺くとも一世を觀察して時勢の活機に通じ彼等現世的詩傑の肺肝を洞察し優に其の上に位せざるべからざるに区々府々として徒に、我の前後にのみ眼睛を転じ三世大の觀念はいふも更なり一世大の觀念、否、一国大の觀念、否、一府大の觀念すらも殆んど時に空しからんとするは之れを詩眼の健ならざるものといふべし。（同三八号「政事と文学」と）

「一我」「一世大の觀念」などの用語の実体を吟味するまでもなく、この多分に抽象的な文壇批判が、結局、批判としての具体的な内実を充分にもちえていないことは疑いえない。その点、すでに半年前、徳富蘇峰が、かなり激越な口調で語つたその「詩人の題目」（『国民之友』二五・一一）の中で、「仏国革命」「英国議院大改革」などの史的事実を挙げて、詩人の社会的な任務を確認し、当時の「新詩詩」の進路に、具体的な指示をあたえた事実、あらためて想起されねばなるまい。

故に曰く新詩詩の為に計る、生を進歩の世界に托するの外なしと。如何にして爾かくせん乎、曰く汝の詩題を一変せよ。如何にして之を変ぜん乎。曰く。風雲月露の自然界より、人生、社会、人物、てふ人間世界に移転せよ。

この蘇峰の積極的な発言は、政治への配慮をもふくむきわめて明確な目的意識にうらづけられたもので、いわば、『国民之友』

創刊（二〇年二月）いらい、その社会一般に対する啓蒙活動の一環として不断につづけてきた文壇への発言を、いちだんと強化したという形である。それに、蘇峰の文壇への提言は、もともと、政治をぬきにしては語りえぬその強靱な実利意識と自己を文壇の実践の埒外に置いた立場の有利とあいまって、つねに、現実的かつ積極的な批評となりうるものであつて、このばあいにも、はつきり、その傾向を指摘できるわけだ。そして、そのような社会的な観点からの文壇への警告は、たとえ、そこに政治的色彩の過剰をみとめるにしても、それが、いずれも、文壇の現状に対する即時的な分析からわり出されたものである点では、その指導者の口吻のうちにも、実践者にとつて、否定しがたい問題提起がふくまれていたはずである。

事実、また、蘇峰の文学的発言への痕跡は、いくつかの誌上に具体的に指摘できることなのだ。たとえば、さきほど検討してきた『早稲田文学』の「政事と文学」とにおける文壇批判などには、その現状打破の唯一の課題として、「詩人の題目」の明示した文学の社会的な方向への展開が、殆んどそのまま、うつしとられているとみてよい。ことに日清戦争直前の極度に緊迫した政治的反動の態勢を考察の背景に置いてみると、「バイロン、シイレールの革命詩人」の出現を、日本の現実に待望する蘇峰と、ラマルチーヌ、ユーゴーの名を挙げて、「一世を觀察して時勢の活機に通じ」る「詩文人」の擡頭を期待する『早稲田文学』記者との間には、その提論としての内面的な対応関係はともかく、文壇に対する問題意識において、明確なアナロジーをみとめることができよう。

また、『早稲田文学』は、前記の「政事と文学」に隣接する「新題目」「新著眼」において、蘇峰の「詩人の題目」と「觀察」（「国民之友」二六・四）の紹介に終始しているが、とりわけ、「新題目」で、

吾人が俗詩人を厭ふこと技巧詩人を厭ふよりも甚し彼の民友子の本意の甚だ高遠なるにも係らず其の新題目を論じたる数箇条は或は誤解せらるるの嫌なきにしもあらじといへる此の故也吾人爰に彼の論に対して些の註脚に類似せるものを添へんと欲す

と、蘇峰の「詩人の題目」の「註脚に類似せるもの」をもつて、文壇への提論とする手順には、たとえ、そこに「公正なる報道者」としての枠をつきくずす激しさはないにしても、『国民之友』の発言への意識的な対応をよみとめることはできると思う。

もちろん、この『早稲田文学』による文壇への問題提起に、とくにその具体的な方法論の提示の脆弱な点において、おのずからなる限界のあることはすでに述べたとおりである。しかし、それにしても、そのような提論としての抽象的偏向にもかかわらず、その問題の内実において、いぜん、黙過しがたいものは残されているわけだ。ことに、以上のように、蘇峰のきわめてラジカルな問題提起を、その本来の客観主義的な立場からの調整をへて、「政事と文学」という広範な課題としておし出した事実には、当時の『早稲田文学』の文学史的意義をみなおそうとする私の最大の理由づけがあるといつてよい。

要するに政治と文学との接近は尠くとも文学者の過少な宇宙を拡充するの効用あらん、よしや仮に其の効用をば必しがたしとするも時勢目下の必要は多少の冒險を行はんことを吾人に勸告す此の故に吾人は政事界と文学界との間に設けられたる背感と冷情との屏障を打碎して恰く此の双界を融会せしめ両者の間に温き同感を成立せしめ多数の文士が狭小なる神我をして尠くとも国家大ならしめんと欲す。(「新題目」同・三八号Ⅱ二六・四)〈傍点筆者〉

というすぐれた判断には、たしかに、当時の文壇現象の根底をつきえた何ものかがあるはずである。「政事界と文学界との間」に膠着した「背感と冷情との屏障」を除去する作業が、事実、その芸術上の実践にもちこまれたか否か、は別として、私は、それを、閉塞状況下にある「明治文学」の「当時当処」の問題として提起すること自体のうちにも、やはり、この時期における『早稲田文学』の発言の否定しがたい功用があつたと思う。そして、複雑な社会現実につつまこまれた問題の所在を正確に「写実」する

ことが、同時に、一種の「批判」に達するような、そういう隱微な形での可能性が写実主義展開の途上、決して皆無ではなかつたことをつけ加えておきたい。

※1、「『浮城物語』を読む」(「国民新聞」二三・五)、「竜溪居士に質す」(「同上」二三・七)

※2、「新題目」、「新著眼」、三八号Ⅱ(二六・四・二五)の「文界現象」欄参照
附 記

拙稿は、主として、昨年発足した「早稲田文学」研究の会におけるグループ研究の過程で討論された諸問題を、私なりの観点でまとめたものにすぎない。その点、昨秋、「早稲田大学国文学会」の研究発表会において報告された保昌正夫氏の「『早稲田文学』の記実主義」につづくものであることを、お断りしておく。なお、「早稲田文学」研究グループは、稲垣達郎教授・川副国基教授ならびに保昌正夫・榎本隆司・清水茂・畑実・久保田芳太郎・紅野敏郎・竹盛天勇の諸氏と私である。